

学習意欲を高めるための保健授業における導入の工夫 Device of introduction of health education to improve willingness to learn

1K09B207-5

指導教員 主査 吉永 武史 先生

谷内口 功気

副査 深見 英一郎 先生

【研究の動機・目的】

導入によって児童生徒の疑問や驚きを抱かせ、そこから児童生徒の「知りたい」「調べてみよう」という意欲を引き出すことのできる保健授業が筆者の理想である。理科授業では、導入において演示実験による事象提示を行い、そこから疑問を引き出し、授業の見通しを持たせるといった授業が行われている。導入を工夫することで、授業に対する児童生徒の意欲が喚起され、確かな学びを保障できる保健授業を作り上げられるのではないかと考えた。

そこで本研究では、学習意欲を高めるための保健授業づくりとして、特に、導入の事象提示から始まる保健授業のあり方に焦点を当て、教材・教具の工夫や用い方、また、発問をはじめとする教師の関わりについての示唆を得ることを目的とした。

【研究の方法】

本研究は、文献研究にて進めていく。保健授業に限らず、事象提示による授業研究が多くなされている理科の授業実践や他教科における導入での教師の関わり方についての文献も参考にし、研究を進める。

【第1章】

小学校、中学校、高等学校の保健授業の状況を掴むために、野津ら（2007）が行った保健授業の実態調査の分析を行った。小学校、中学校、高等学校を通して、保健授業に対して肯定的な感情を抱いている児童生徒は少なく、それぞれの単元に対して「好き」と答えた割合は、全体の約3割にとどまった。さらに、保健授業の中で、児童生徒が考える時間や活動が十分に行われていない現状が伺え、その原因として、十分な教材研究が為されずに教科書に頼った知識の伝達を中心とする授業が行われていることが関係しているのではないかとという示唆が得られた。

【第2章】

授業の導入において、本時の課題を明確に示すことは、教師がやらなければならない活動の1つである。課題を示すまでの過程をどのように活用するかは、それぞれの教師に委ねられている。筆者の理想は、児童生徒の疑問を引き出し、それを授業の課題として授業で扱うことである。そうすることで、「知りたい」「調べてみたい」という意欲が喚起され、生徒の主体的な学習活動を期待することができる。そのために、導入に事象提示を取り入れた授業に焦点を当て、理科、保健

における実践例の考察を行った。

理科授業では一般的に、導入の事象提示として演示実験を用いている例が多い。実践例から、児童生徒はこれまでの経験と目の前の事象とのずれを感じたときに疑問を抱きやすく、そのような事象を提示することが学習意欲を喚起するに効果的であるという示唆を得た。

保健授業の実践例では、事象提示として視聴覚教材や実験、即興劇を扱った例を分析した。様々な活動を導入で活用すること、また、それらの活動の活用は学習意欲を喚起するという点で意義があると考えられる。

【第3章】

児童生徒の学習意欲を喚起するには、単に事象提示を行えばよいだけではない。そこで、生徒の学習意欲を高める保健授業に必要な要素として、「学習形態」、「学習指導」、「教材・教具」に関する考察を行った。

「学習形態」については、ロールプレイング、実験・実習、調査・見学などの「体験学習法」（吉田, 2010）を積極的に活用していくべきである。さらに、これらを導入、展開にわたる授業の軸として活用することで、導入での学習意欲の高まりを展開での実際の体験活動に向けながら学ぶ授業を作ることができると考えられる。

事象提示によって児童生徒に生み出された疑問は、発問や教師の構えによって深められる。また、グループ活動をうまく活用することで、集団として学習意欲の高まりを促すことができる。

また、たばこと疑似高齢者体験用の自作教具2つを紹介した。たばこの自作教具を事象提示に活用した「喫煙と健康」の授業の提案を行った。

【結章】

どの教科においても、生徒にとって楽しく、分かりやすい授業を作るためには、まず教師がその教科の楽しさを理解することが始まりである。そのうえで、生徒の姿を思い浮かべながら教材研究に励み、試行錯誤を繰り返す過程を経て、良い授業は作られていく。本研究では、児童生徒の学習意欲を高めることをねらいとして、事象提示から始まる保健授業の考察と提案を行った。今回の研究で扱った事象提示を用いた授業を実践する機会があれば、生徒が目を輝かせて取り組む授業となるように、教材研究を重ね、児童生徒との学び合いの中でより授業の質を高めていければと考えている。